



安八郡輪之内町
松岡 廣美さん



懸崖菊

けんがいぎく

摘んで、整え、理想のかたちに 作り続けて41年、継承する喜び



満開時、多くの花を咲かせる懸崖菊

輪之内町の農家で 全国シェア6割

松岡廣美さん(66)は、輪之内町で50年近く懸崖菊を栽培しています。祖父の政吉さんが趣味で行っていた懸崖菊作りが始まりで、飲食店や病院などに提供していました。

父の茂さんの代になると、他にも栽培を行う農家が現れ、生産者組織も発足。それが「輪之内町けんがい菊生産組合」です。作業工程や販売方法などを話し合い、生産力と売り上げの向上を図りました。廣美さんは「生産量増加のきっかけの1つが1970年の大阪万博の開催。鉢から小菊の花が溢れ出たかのような華やかさが好評となり、販路を関西に広げられた」と振り返ります。



芽の先端を切り落とす摘心作業

輪之内町は水が豊富で懸崖菊を作るのに適した土地。夏は日中が暑く、夜は冷え込む寒暖差が花の色の鮮明さを引き出しています。輪之内町の懸崖菊農家はわずからず、それでも年間約3万鉢もの懸崖菊を栽培しており、全国シェアの約6割を占めます。

売り込むための 一大決心

廣美さんが25歳の時、茂さんが亡くなり、20代の若さで大黒柱を担うことになりました。これまで成果を出してきた要因を「農業に対して固定観念を持たず、商品としてどう売り込むべきか考えた」と言います。



松岡さんとJAにしみの営業担当小野さん

岐阜の豊かな自然の恩恵を受けて育つ農産物を伝えるシリーズも10回目。輪之内町の特産品である懸崖菊は、茎が崖から垂れ下がるように伸びた形が特徴的で、1鉢に約千輪もの花が咲きます。同町で作られている家庭観賞用の6号鉢の懸崖菊は、全国シェアの約6割を占め、生産量日本一を誇ります。今では全国各地に配送されるようになった懸崖菊を作り続ける輪之内町けんがい菊生産組合の代表、松岡廣美さんの歩みを紹介します。

多くの世代に 魅力を伝える

廣美さんは「祖父の代から受け継ぐ懸崖菊を、輪之内の特産品としてこれからも継承していく」と言います。魅力を知ってもらうため、一般向けの懸崖菊作り教室を町内で開くなど、裾野の拡大に取り組んでいます。

若い世代に魅力を伝えることにも注力。輪之内町の小学生の総合学習の時間では、懸崖菊を作ってもらっています。更なる生産力向上のために、JAバンクの「アグリサポート資金(※)」の活用も検討しており、よりよい栽培環境を整えていきます。

※設備資金から運転資金まで、幅広い用途に活用できるJAの農業資金。詳しくは、JA窓口までお問い合わせください。

本広告に関するご意見・ご感想をお聞かせください

抽選で
10名様に
プレゼント

「西美濃産メロンのパウムクーヘン」と「お米のゴーフレット」のセットを10名様にプレゼント
大垣市のパウムクーヘン専門店「よしや」と開発した、海津メロンを使ったパウムクーヘン。素材の水分だけで焼き上げ、しっとりとした生地にはメロンの風味がたっぷりと詰まっています。ゴーフレットは西美濃で栽培したハツシモ米で作った生地にお茶のクリームがサンド。甘さ控えめのお菓子です。

①郵便番号・住所 ②氏名 ③電話番号 ④紙面に関するご意見を明記して下記の方法でお申し込みください。
【はがき】〒500-8875(住所不要) 中日新聞 岐阜支社 広告部「ぎふの農業人」係
※個人情報(賞品発送)において使用し、適正に管理します。※当選者の発表は、賞品の発送(翌月予定)をもってかえさせていただきます。

10/19(金)
必着



JAにしみの輪之内支店長
田中隆嗣さんから

輪之内町の伝統といえる懸崖菊をこれからも受け継いでいくために、作り手である農家と輪之内町をつなぐ存在として支えていきたいと思っています。先代から譲り受けてきた輪之内町の誇りである懸崖菊を、託す者から託される者につないでいく役割も果たさなければいけません。商品用である5号、6号鉢の懸崖菊で、今後も全国シェアトップを占めるようにするためには、地域住民とのつながり、行政との協力といった様々な連携が必要。私たちはその間に常に関わっていき、これからも頑張っていきたいと思っています。



耕そう、大地と地域の未来。

秋の涼風を感じ、 千輪もの花が咲き誇る

懸崖菊をもっと身近に
生産者の想いに寄り添い、共に歩むJA



JAぎふ / JAにしみの / JAいび川 / JAめぐみの / JAとうと / JAひがしみの / JAひだ

—— 岐阜県下JAは農業のメインバンクです ——